

に、一首のリズムが明るい。とくに下句、七七を漢字八字で表現した工夫に感心した。

常緑といへども初夏の園に立つ樟の若葉の緑あたら
し 松橋雅実

常緑樹とはいえやはり初夏の緑は特別だ、という一首の大筋は説得力がある。ただ、「園に立つ」はいかが。公園なのか、庭園なのか。あるいは果樹園、農園、学園などなのか。「園」という語が、現在あまり使われないからだろう、この語だけで一首全体が古風な感じになっ
てしまった感じがする。

抱卵の巢より伸びたる椋の尾のすつと長きを息つめ
て見る 金 有美

ムクドリの特徴を「椋の尾のすつと長きを……」ととらえた気合いに感心した。ムクドリは戸袋など、人家に巣を作ることもあるから見かけるチャンスも多いが、このようにシンプルかつ印象深く表現するのはむづかしい。点滴の夕日の色のしずむときわれのからだをめぐる
夕焼け 川又和志

なんとも美しい点滴の歌かと感心して読んだ。抗がん剤を投与されながら、高熱と微熱のあいだをゆききしつつ病床にあるという作者。暗くなりがちだろう気持ち
を、自身ではげましておられるのだろう。「われのからだをめぐる夕焼け」というフレーズは、一読、すぐにおぼえてしまった。

安藤寛の歌碑除幕式浄智寺に歌人の集ひし昭和五十三
年五月 長谷川静枝

北鎌倉の浄智寺にある安藤寛さんの歌碑をドキュメント・タッチでうたう一首。新しい会員は安藤寛を知らないかもしれない。一八九二年、佐賀県生まれ。佐佐木治綱主宰時代の「心の花」編集委員の最長老で、実業界での経験を活かして、「心の花」の経済面での立て直しに尽力された功績は大きい。鶴沼に住んでおられた関係で、湘南歌会に長く関わられ、多くの後輩を育成された。歌碑の歌は「結界に降る雨あしは光りつつ深き杉生のみどりにしづむ」。寺に立つ歌碑にふさわしい、静かで、いい歌だと思う。除幕式には若い私も参席。昭和五十三年といえ、私はまだ三十九歳。結婚したばかりで、頼綱もまだ生まれてなかった。

口笛を吹くかのごとき画眉鳥のさえずり聞こゆ歌会
愉し 森部信次

長谷川さんの歌を選んだすぐ後、この作を見つけた。安藤寛さんの歌碑がある浄智寺で、コロナの關係で三年ぶりに開かれた湘南歌会に、作者は出席したのだという。野鳥好きで、野鳥に詳しい作者らしい北鎌倉での作。南天も万両の実も食み尽し鶴は庭の蛇の髭漁る

水本 光

ツグミは大食いの鳥で、札幌の大通公園のナナカマドの実をあつという間に食べ尽くしたという記事を最近読んだ。大食いのツグミは蛇の髭の実も食べるのだろう。余談ながら、石川一成第一歌集『麦門冬』、このバクモントウとジャノヒゲとリュウノヒゲはどうやら同じ草らしい。